

編集後記

李白・杜甫、あるいは、漢詩の名詩というくくりであるのならとにかく、いくら歴史上の重要人物とはいえ、王安石の詩、しかも五言絶句のみに限定しての訳注を、本として出版することは難しい。本書第一章王安石五言絶句訳注は、『中唐文学会報』に掲載させてもらった。だが、北宋の詩を中唐文学研究を詠う雑誌に載せるという苦肉の策であった。王安石を読み終わったあと、新たに読み始めた『宋詩別裁』五言絶句まで訳注を『中唐文学会報』に載せてもらうのは難しいだろう、ということで、成果発表として私家版の冊子を作成することとなった。

その時、冊子体で細々と流通させるのではなく、何らかの形で、アクセスしやすい方法がないかと考え、学術レポジトリを思い当たった。代表である和田英信の所属先お茶の水女子大学のレポジトリ TeaPot を閲覧したところ、E-book サービスがあることに気が付いた。この方式であれば、出版のお金はかからないし、必要な時に必要な人に参照してもらえるではないか、と考えたのである。

それであれば、『宋詩別裁』だけでなく、『中唐文学会報』に掲載した王安石の五言絶句訳注も修正ののち、一緒にすることで、本としての分量も確保しようということになった。『宋詩別裁』の私家版冊子刊行から約一年、ここに新しい形の訳注書が誕生した。

『宋詩別裁』の私家版冊子のときから、詩に原題を附すなど、いくつか体裁を変更した。また、王安石五言絶句訳注についても、誤りをだし、新たな体裁に統一する作業を行った。その中で、現在会に参加していない三瓶はるみの作成分原稿については、現在の参加者が分担して原稿を整えた。このとき、訂正者が、体裁の変更に留まらない内容面での変更を加えることもあった。その場合、三瓶はるみの名に加えて補訂者として名前を列記した。あまりに大幅な

原稿変更となった場合には、訂正者のみの名前をしるした。

このような、元の担当者から原稿を引き継ぎ完成原稿を作るという方法は、『中唐文学会報』王安石五言絶句訳注稿その1掲載時にも行っていた。『中唐文学会報』掲載時には、原稿作成者の名をあげていたが、今回は削除した。ここに、そのもとの原稿作成者の名前を列記しておく（五十音順）。

戸高留美子・巻田洋平・渡部れい子

今回本書は、佐野が $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ を用いて組版を行った。なおフォントは、独立行政法人情報処理推進機構によるフリーフォント、IPAex フォント及び IPAmj フォントを利用した。IPAmj フォントまで使えば、すべての文字を出力することが可能であったことをつけ加えておく。

（佐野誠子）